2026年1月 30 日
T.Kobayashi

古事記から学ぶ その4
伊邪那岐命から託された三人の御子たち

<1> 伊邪那岐命から託された三人の御子たち

黄泉國から帰った伊邪那岐命が、穢れた身を清めた時に数々の神が生まれた。
最後に生まれた三人の御子たちに、それぞれの任務を与えて、次の世を託した。
●天照大御神には「高天原を治めよ」と、●月読命には、「夜之食國（よるのおすくに）を治めよ」と、そして●建速須佐之男命には「海原を治めよ」と命じた。
しかし、建速須佐之男命だけが約束通りの行動を取らず、泣き叫び、乱暴狼藉を働き続けた。
父伊邪那岐命が真意を確かめると須佐之男は、「亡き母（伊邪那美命）に会いたい」
「母の住む根之堅洲國（ねのかたすくに）に行って一目でも会いたい」と、言うことを聞かない。
伊邪那岐は腹を立てて、「勝手にしろ、もうこの国には住んではならん」と追い払ってしまった。
須佐之男は、「姉君（天照大御神）に挨拶をしてから母の國へ出かけます」と言って去った。
須佐之男は高天原へ向かって上がって行ったが、荒れ狂う弟が上って行くにつれて山も川も天も地も鳴動し続けた。
待ち受ける天照大御神は、天地の鳴動にただ事ならぬものを感じて、弟が我が国を奪いに来たのではないかと心配して、男装して対処しようと身支度を始めた。
須佐之男が高天原に着くと天照は真意を尋ねた。須佐之男の答えは
「母の住む根之堅洲國（ねのかたすくに）に行く前に、姉君に挨拶をしようと思って来ただけだ」
「お前はいつもそう言いながら乱暴を働くので信用できない」
「ならば、二人で誓いを立ててうけい（＊註）をすることにしよう。二人がそれぞれ子供を生んで、その子供を見て私が安らかな心であることを、神意をもって判断してもらうことにしよう」 と言うことになった。

＊うけい「宇気比」・・・古代の神事の一つで、神に誓いを立てて「こと」にあたり
その結果によって、神の意志どおりであることを証明する儀式
望ましい結果が得られるように、祈祷や呪詛を行う

二人は、天安河（あまのやすのかわ）を挟んで「うけい」の儀式を行い、神意を伺うことになった。

<2> 天照大御神と須佐之男命の対決

まず天照は、須佐之男の十拳剣（とつかつるぎ）を受け取り、三つに折ってそこへ天之眞名井の清らかな水を注いで洗った。そして、それを口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。
天照大御神 （須佐之男命から受け取ったものから生まれた神は）
=●多紀理毘売命（たきりびめのみこと）：河の早瀬を示すもの。
別名 奥津島比売命（おきつしまひめのみこと）
=●市寸島比売命（いちきしまびめのみこと）：別名 狭依理毘売命（さよりびめのみこと）
=●多岐都比売命（たぎつひめのみこと）
次に須佐之男が、天照の左の角髪（みずら）に巻いてあった500個の勾玉の玉飾りを受け取り、天之

眞名井の清らかな水を注いで洗った。そして、それを口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（まさかつあかつかちはやびあめのおしほみみのみこと）を頭に五柱の神が生まれた。

須佐之男命　（天照大御神から受け取ったものから生まれた神は）

- ●正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（まさかつあかつかちはやびあめのおしほみみのみこと）
  誓いに勝って勝ちすさびたことを示すもの

  次に須佐之男命が、天照大御神の右の角髪（みずら）に巻いてあった玉飾りを受け取り、口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。
- ●天之菩卑能命（あめのほひのみこと）

  髪を縛った蔓に巻いた玉飾りを受け取り、口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。
- ●天津日子根命（あまつひこねのみこと）

  左手の玉飾りを受け取り、口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。
- ●活津日子根命（いくつひこねのみこと）

  右手の玉飾りを受け取り、口に含み噛んで吹き出すと口から出た息が霧になりそこから神が生まれた。
- ●熊野久須毘命（くまのくすびのみこと）

天照はこう整理した。

「あとから生まれた5人は、私の持物から生まれたので私の子、先に生まれた3人はお前の持ち物から生まれたからお前の子だ」

須佐之男の立場は認められた。結果として、生まれた両者の子ども8人は、こんな行く末になった。

須佐之男命の子

- 多紀理毘売命→筑紫胸形の奥津宮に鎮座・・・筑紫の宗像大社の沖津宮（沖ノ島にある）
- 市寸島比売命→筑紫胸形の中津宮に鎮座・・・同上　　中津宮（宗像大島にある）
- 多岐都比売命→筑紫胸形の辺津宮に鎮座・・・同上　　辺津宮（宗像大社にある）

天照大御神の子

- 正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命：誓いに勝って勝ちすさびたことを示す
- 天之菩卑能命→建比良鳥命：天を下り辺境を平定したの意（のちに生まれる以下の人の祖先）
  - ＝出雲国造
  - ＝无邪志（むざし）国造（→武蔵）
  - ＝上つ菟上（うなかみ）国造（→上総海上）
  - ＝下つ菟上（うなかみ）国造（→下総海上）
  - ＝伊自牟（いじむ）国造（→夷隅）
  - ＝津島の県直（あがたのあたえ）（→対馬）
  - ＝遠江国造

┃
┃═天津日子根命→→　のちに生まれる以下の人の祖先
┃　　┣═凡川内（おうしかわち）国造　　（→のちの河内）
┃　　┣═額田の部の湯坐連（ぬかだのべのゆえのむらじ）
┃　　┣═茨木国造　　（→のちの大阪茨木）
┃　　┣═大和の田中の直（あたえ）
┃　　┣═山代国造　　（→のちの山城）
┃　　┣═馬来田（うまくだ）国造　　（→のちの上総馬陀：小櫃川の岸辺）
┃　　┣═道尻岐閇（みちのしりのきえ）国造（→のちの常陸國）
┃　　┣═周芳（すおう）国造　　（→のちの周防）
┃　　┣═大和の淹知（あむち）造　　（→のちの天理あたり）
┃　　┣═同　　高市の県主（たけちのあがたぬし）・・・これは姓
┃　　┣═蒲生の稲寸（いなき）　　（→のちの滋賀県蒲生郡）
┃　　┗═三枝部の造（さきくさべのみやつこ）
┣═活津日子根命
┗═熊野久須毘命

しかし、須佐之男は姉の天照に対して、「ごらんのように私の心は清らかで何の異心もない、私が生み出したのは心の優しい女の子ばかり。うけいの神事がこういう結果になったから、私の勝ちですね」と言い、天照が造っている田圃に踏み込んで、畦・水路などをめちゃめちゃに踏み壊して、新嘗のための神殿に糞をしてまわるという狼藉を働いた。
天照は、弟の乱暴狼藉に何ら歯向かうことはなく、無視して見逃していたのだが・・・。
ある日、神に献上する衣を織るため、忌服屋（いみはたや）という神殿で、織女（おりめ）を集めて仕事をしていたら、須佐之男が襲い掛かり、建物に穴をあけて「斑色をした馬の皮をはいだ無残なもの」をそこに投げ込んだ。機織りをしていた織女の一人が、驚きのあまり、機具の梭（ひ：＊註）の端で陰処を突き、それがもとで死んでしまった。
天照は、弟のあまりの蛮行に恐怖を感じて、天石屋（あめのいわや）の中に隠れてしまった。
＊註　梭：機織りで横糸を通すのに使う道具で、現代語でシャトルと言われているもの

<3> 闇の世界の到来

日の神である天照大御神が天石屋に隠れてしまったことにより、天上の高天原は太陽が沈んで暗闇になってしまい、地上の葦原中國（あしはらのなかつくに）も同じように闇の世界となった。
そしてこれを好機として、悪い神が騒ぎ始めて、あらゆる禍が一時に起こってきた。
さていかに対処すべきかと、八百神（やおよろずのかみ）が天安河の河原に集まって対策会議を開くことになったのだが・・・・・。

以上